法律相談 R4 ❹

# 『"徳育"の重要性』

髙橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「髙橋・日浦法律事務所」代表。

世間がバブル景気に沸いていた頃、私は東京新宿からそれほど遠くない木造アパートに住んでいた。毎日通う新宿駅には、改札口を出ると株価の数字が刻一刻と変わっていく電光掲示板があり、数多くの会社員が歩く足を止め、何者かに追われているような形相でメモ帳を取り出して何かを書き綴っていた。そういう彼らの大半は、1947年から1949年に生まれた、いわゆる団塊の世代である。

大学進学率が約15%程度と言われていた団塊の世代の大部分が、1970年の安保闘争を経験し新左翼的な考え方にシンパシーを抱いていたとは到底考えられない。中学や高校を卒業してすぐに「金の卵」と呼ばれた層が圧倒的に多く、地方から東京や大阪などの大都市に集団就職して日本経済の底を支え高度経済成長の原動力となったことは紛れもない事実であるが、他方で、安保闘争などの新左翼的な運動への理解を示す風潮があったことも否定できない。このような世代の方々の一部が青年期に新左翼的な考え方にシンパシーを抱きながら、中年期に入ると株価などの数値に一喜一憂し、周りの者から少しでも生き遅れないように「右向け～右！」と突き進んでいった姿が、テレビの画像に映し出される安保闘争のデモ行進と似ていて妙だと思うのは私だけだろうか。団塊の世代は青年期に考えていた行動原理を自ら総括しないまま就職し、バブル期に向かって邁進した世代であると考えられる向きもある。そして、昨今、フリーターや派遣労働者と呼ばれている方々は、核家族化した団塊の世代の子どもたちが多いと言われている。

さて、今回は教育改革について述べてみたい。

地下鉄やレストラン、居酒屋でも、近くに他のお客様がいるにもかかわらず、携帯電話で話をしている者がいる。携帯電話禁止（マナーモード利用）のアナウンスが流れ、テーブルの上に携帯電話禁止の告知がされているにもかかわらずだ。あるマンションでは、エレベーターの中で痰を吐く者がいるからか、痰を吐き捨てる空き缶まで用意して対処しなければならない状況もある。また、自動車の運転席の窓を少し開け、煙草の灰を捨てるだけではなく、吸殻までも窓から捨てる運転手の姿を見かけたことが一度や二度はあるのではないだろうか。

その時さえ良ければいい、バレなければいいとしか考えられない身勝手な行動が周りに散見される。ほんの少しだけ周りにいる人々へ配慮する気持ちがあれば、身勝手な行動はなくなると思う。このままでは日本という国はどうなってしまうのか。どうすれば改善できるのかということを考えるにつけ、これからの若い世代に大きく期待したい。その意味で教育改革は大きなテーマである。

「徳育」とは、道徳心のある、情操豊かな人間性を養うための教育のことをいう。安部晋三氏が内閣総理大臣だった頃、教育再生会議にて、平成20年1月31日に出した「社会総がかりで教育再生を・最終報告～教育再生の実効性の担保のために～」が最終報告として提出された。1つの柱として、徳育を「教科」として充実させ、自分を見つめ、他を思いやり、感性豊かな心を育てるとともに人間として必要な規範意識を学校でしっかり身に付けさせること、家庭、地域、学校が協力して「社会総がかり」で、心身ともに健やかな徳のある人間を育てること、体育を通じて身体を鍛え、健やかな心を育むこと、「いじめ」、「暴力」を絶対に許さない、安心して学べる規律ある教室にすることなどが記載されていた。しかし、安部晋三氏の退陣によって目に見える形では進まなくなった。私にはこのことが非常に残念でならない。これからの教育の現場で徳育を重視することは、戦前の軍国主義的発想に近いとか、教育勅語的な発想に近いというように揶揄される向きがあるが、どうして、道徳を重視する教育を目指すことが、すぐさま戦前の発想になるのかが皆目検討もつかない。

今以上に徳育が重要な時代はないと思う。少しずつ日本の伝統が失われ、日本民族が持っていた「周りに対する配慮の気持ち」などが受け継がれなくなって久しい。徳育軽視の弊害は、バブルが弾けた後の「失われた10年」どころの話ではない。はっきりしない社会的風潮に乗っかり、何とも言えない雰囲気で物事を「いい」とか「わるい」とか判別する傾向が強くなっているのではないかと思う。日本人の多くが、物事を感覚的に捉えて最終的な判断をしてしまっているように感じる。「自分を見つめ、他を思いやり、感性豊かな心を育てる」ことを目的とした徳育の重視は、私がいま希望する一番の大切なことである。